

最後のホットスポット : 滋賀県立大学を去るにあたって

布野 修司

元環境科学部環境建築デザイン学科教授
副学長・教育研究担当理事

滋賀県立大学には、2005年4月から2015年3月まで、丁度10年お世話になった。楽しく伸び伸びと過ごさして頂いた。心から感謝したい。

個人としての10年は、最終講義(2015年3月14日)に合わせて研究室の卒業生たちが編んでくれた『布野修司の世界－滋賀県立大学の10年－』に委ねたいが、研究成果としては、『近代世界システムと植民都市』(布野修司(2005):日本都市計画学会賞受賞)『曼荼羅都市－ヒンドゥー都市の空間理念とその変容』(布野修司(2006))『ムガル都市－イスラム都市の空間変容』(布野修司+山根周(2008))『韓国近代都市景観の形成－日本人移住漁村と鉄道町－』(布野修司+韓三建+朴重信+趙聖民(2010):日本建築学会著作賞受賞)『グリッド都市－スペイン植民都市の起源、形成、変容、転生』(布野修司・ヒメネス・ベルデホ、ホアン・ラモン(2013):日本建築学会著作賞受賞)を上梓し、最後に締めくくりとして、『景観の作法－殺風景の日本－』(京都大学学術出版会、2015年1月)、『大元都市－中国都城の理念と空間構造－』(京都大学学術出版会、2015年2月)の2著もまとめることができた。科研費も10年間連続いただくことができ、思う存分フィールド・ワークを展開することができた。指導した学位請求論文は、以下の5本である。

趙聖民『日本植民地期における韓国・鉄道町の形成とその変容に関する研究』2008年

高橋俊也『京都における墓地空間の変容と都市周縁空間の環境整備手法に関する研究』2008年

岡村智明(山根周研究室)『インドにおける歴史的港市の形成と変容に関する研究－カッチ地方のマンドヴィ、バドレシュワル、ムンドラを事例として－』2008年

川井操『西安旧城・回族居住地区の空間構成とその変容に関する研究』2010年

Chantanee Chiranthanut『メコン中流域におけるタイ・ラオ族の住居集落形態とその変容に関する研究』2010年

趙沖『福建港市における住居類型の形成、変容に関する研究』2013年

着任したのは法人化1年前であり、前年12月、

スリランカのゴールでインド洋大津波に遭遇、危うく命拾いしたこと、4月25日の福知山線の脱線事故が未だ記憶に生々しい。翌年、「もったいない」をスローガンに嘉田知事が誕生、2期8年の県政が布野修司の滋賀県立大学の10年間とほぼ重なっている。

着任すると、まずお手伝いしたのが、近江環人地域再生学座の立ち上げである(平成18年度文部科学省が新たに創設した「地域再生人材創出拠点の形成プログラム」へ応募)。奥貫隆先生を中心に進められてきた、いわゆる現代GP「スチューデントファーム「近江楽座」－まち・むら・くらしふれあい工舎－」の後継プログラムが必要とされ、手伝うようにということであった。

文部科学省のねらいは明らかに地域産業を担う人材育成にあり、どういう人材育成にターゲットを絞るかという議論から始めたのであるがまとまらない。結局、ご承知のように「地域診断からまちづくりへの展開をオルガナイズできるコミュニティ・アーキテクト(近江環人)」の育成ということになったのだけれど、2000年から京都で続けてきた「京都コミュニティ・デザインリーグCDL」の活動(『京都げのむ』1号～6号)が多少のヒントになったのではないか、と思う。

構想の目的として、以下のようにうたった。

「本構想は、湖国近江の風土、歴史、文化を継承し、自然と共生した美しい居住環境、まち並み景観、循環型地域社会を形成するために、地域診断(環境、防災、土地利用、景観、資源、エネルギー等)からまちづくり(コミュニティ活性化、環境改善、市街地再生、地域文化育成等)への展開をオーガナイズできる人材(近江環人＝コミュニティ・アーキテクト)を、行政、企業、NPO団体による地域再生の具体的なプロジェクトと強く連携しながら育成することを目的とする。

本構想が、養成しようとする、「地域診断からまちづくりへの展開をオルガナイズできるコミュニティ・アーキテクト(近江環人)」とは、具体的には、以下のような人材像としてイメージされる。

「コミュニティ・アーキテクト」という言葉は、地域主体の開発(コミュニティ・ベースト・ディベロップメント)を担う人材として、欧米では一般的となりつつあるが、本構想では、フィジカルプランニング(物的計画)に関わる、狭義の、建築家・都市計画家・造園家などを想定するのではなく、社会システムや人的ネットワークの構築なども含めた地域社会の総体を再生するリーダー、マネージャーとして「コミュニティ・アーキテクト」を位置付ける。「コン

ピューター・アーキテクト」という言葉が用いられように、アーキテクトの語源に遡って、理想は高く、アルケー（根源）のテクトン（技術）に関わる職能の養成を掲げたい。地域を愛し、地域の歴史、文化、社会、経済等に通じ、地域に関わり続ける意欲をもつ人材、フィールドでの発見を大事にし、現場での発想を基本とする人材、問題解決のために様々なネットワークを構築する柔軟かつ広い視野を有する人材が「コミュニティ・アーキテクト」の理念である。

即ち、地域社会との係わりにおいて「知」の中核となるべき大学の使命として、次代のを担う有為な人材に対して、実践的知恵（*pronesis/practical wisdom*）を授け、「客観的で正しく判断する力」、「人を共感させる力」、「本質を洞察する力」、「他者へ伝達する力」、「人を動かす力」、「人を育てる力」を有したリーダー、マネージャーとして「近江環人＝コミュニティ・アーキテクト」を養成することが本構想の目的である。

以降、振り返ることはしないけれど、その流れはCOCにつながっているところである。苦い思い出は、後継の『地域学副専攻化による学士力向上プログラム』（1 地域学教育の体系化：地域に学ぶ力の育成を大きな柱とした教育システムの充実化と体系化 学生の地域貢献活動を支援する 現代GPプログラム「近江楽座＝スチューデントファーム」（2004-2006）の持続充実化 2 「近江楽士（コミュニティ・ネットワークカー）」副専攻プログラムの創設「近江楽士」の称号の授与 3 地域と大学の双方向型教育プログラム：（三方よし：売り手よし、買い手よし、世間よし）学生よし（学生のスキル向上）、大学よし（大学の特徴強化）、地域よし（地域活性化への寄与）4 「ネットワーク力」の評価システムの確立）が事業仕分けにあって打ち切りになったことである。

滋賀県立大学の特別研究は、「琵琶湖自然共生流域圏の構築－宇曾川流域圏モデル」（2007－2008年）と「東アジアにおける歴史的城郭都市の起源・形成・変容・再生に関する総合的比較研究－近江近世城下町の東アジアにおける歴史的意義と位置づけの解明－」（2007年）に参加させて頂いた。小さな大学ではあるけれど、あるいは小さな大学であるからこそ、分野を超えた研究交流は貴重な経験であった。ただ、全てが大満足であったということではない。「アジア・エコハウス・モデルの研究開発（設計計画）（JST「地域に根ざした脱温暖化・環境共生社会」）」といったプロジェクトには何度か応募したけれど力不足であった。

滋賀県および各自治体の仕事についても微力ながら多少のお手伝いをさせて頂いた。特に、最近では、守山市の守山中学校、浮気保育園、そして県の新生美術館の設計者選定について公開ヒヤリング方式を導入、一定の評価を頂いたと考えている。

後半の5年間は、環境科学部長（2010～2011年）、副学長・理事（研究・評価担当）（2012～2014年）

として、管理職を務めさせて頂いたけれど、果たしてお役に立てたかどうか自信がない。学会活動はむしろ優先的に認めてきていただいたので、ご迷惑をかけた方が多かったかもしれない。ただ、学生とのつきあいを第一に、教育研究の現場の感覚を大学の意思決定に活かすべく多少の努力はしてきたつもりである。その成否は、皆さんの評価に委ねたい。

26歳で東京大学の助手に採用されて以降、東京大学、東洋大学、京都大学、そして滋賀県立大学と39年間の大学生活を振り返って、大学が大学らしくなくなっていく過程を、身をもって体験してきたような気がしないでもない。大学に入学した年、二ヶ月もたたないうちに学生はストライキ、大学はロックアウトされた。以降、一年以上授業はなかった。大学とは自ら学ぶところである、という思いは学生の頃から一貫する。

大学の知の退廃を告発したのが1960年代末の全共闘運動であったと思うが、その告発に共感したものが、その後どれだけのことがなしえたのか忸怩たる思いが残る。愚痴を零してもはじまらないけれど、大学に籍を置いてきたものの責任は大きいと思う。教え子たちが既に方々の大学で教授になり、後進を育てつつある。特任教授としてもう少し大学に関わることになるが、新たな職場を拠点に、しばらくは、学生たちの後方支援ができればと思う。

滋賀県立大学は、素晴らしい大学であった。そのユニークさを失わず、建学の精神に繰り返し立ち返りながら、さらに発展して行って欲しい、と願う。